

研究通信

16. 42

会局
研究室
教育
研究
平丁
市
東
北
大
學
社會
仙
東
市
北
大
學
社會
合
村
事
落
社
會
務
研
究
室
1962.4 刊

十周年大会の年をむかえて

竹内利美

「十年一昔」というが、村落社会研究会も、發足以來ちょうど十年になり、年報の發刊も、九月を數えゐるまでになつた。その間、会勢は飛躍的に發展したとは、いいえない現状であるが、まずは「細く長く」、ともかく年々一回の定期もなく、今日までつづいたことは、御同慶の至りといわねばなるまい。仙台に社会学大会がひらかれたのを機に、この会は發足しを。そして、学会終了の翌日という興条件のもと、準備万端全く不行詰きのなかでおこなわれた才一回大会であつたにもかかわらず、閉会の聲もぬきに帰りの汽車時間の迫るもの忘れて、談論風発、何時渠てるとも思えなかつたあの夕刻談話のひとときが、今さうのようだ、なつかしく想起されるのである。たまたま、事務局を西廻、東北大学でおひきうけすることになり、また、十周年の大会も、提出しに廻つた・仙台で今秋ひらかれることにさきつた。發今當時、大会開催の番頭役をつとめた私たちには、とりわけ、感慨深いものがあるわけだ。しかし今はそうした回顧に低迷していくよい段階ではなく、むしろ、会創設の眞実にちかえり、卒直に十二年の足どりを反省して、いささか悔氣味の現勢を、打開する途を見出すより、おたがいに努力すべきではある

まいふと思われる。

「日本部落の研究」という共通の研究対象を持ちながら、それが専門の立場を異にし、したがつて分析の視角にもくいちがいのある研究者たちが、率直におたがいの成果を披露し合い、討論をされ、よい刺激を与えた考え方られる。つまりは、などやかな雰囲気のうちにも、きびしい学的態度を堅持した、おたがいの研究水準を高めるに役立つよい学的交流の場をつくりだそらというのが、今満足の一つの理由であつたようだ。もちろん、そのままで、社会科学の研究者が当初から比較的多く、そのため会運営の面でも、いわば推進的な役割を果す人々が、社会学関係のよう、個がちがつたことも、事実である。しかし、そうした毫尾の当時事情が、十年間だいたいそのままの形でひきつがれ、すくなくとも、ひろく領域の研究者を、次々に包含するという方向には、伸びていなかつたことは、一つの問題であると言わざるをえない。とくに、社会学以外の領域で活んど新進気鋭の人々を、ひろく仲間に呼び集めえたかつたことは、心残りであつた。さらには、全般的みて、意外に新しい会員獲得が不活発で、会員の固定性が、ここ数年、とりわけ目立つてもきた。「細く長く」ともかくつづいた理由が、実はこうした傾向の伸開のなどをかな人間関係に支えられていた点に、かかつていたことは認めざるを得ないが、いつまでもこのままでは、末細りのおそれが充分にあろう。年一回の大会にもちだされる課題のとり方やその扱い方にも、いささかマンネリズムのきらいがあるようだ。たとえば、現状分析一边縛といつた傾向なども、多分反省されてよいのではないか。年報統刊も難關にあつてゐるが、それは別としても、編集内容などにも、もつとおたがいに注文を出し合つて、新しい方向をさがしてみたいものである。

また事務局のひきつきも、十分済んでいない段階で、とりあえずこの通信を編んだので、万事ゆきとどかぬ点だけであるし、また、秋の大会の持ち方についても、具体的な相談をするところまではい

(三〇二)

つていいまじい。それらをついては何れ欠号でよ
知らせしたいが、どうか十年間の反省にもと
よく会員所管の忌憚のない御意見御感想を、
おしとしお寄せねがいたい。次の通信では、
それをもとにし、村研の今後のあり方をめ
ぐる明確特徴のようなものを、網集して御届
けしたいと考えている。事務局と大会当番を
仰せつかつたものとして、以上のような要望
をしるして、まずは御挨拶にかえる次第であ
る。

二の問題

田原音和

昨年の村野大会には新しいののためにとうとう出場できなかつた。のみならず、しばらくフレーレドを離れていたと、焦そうをきを感じる。ということは、それだけ農村の突り方が激しいからでもあるが、こちらの方もそれに劣ら半氣ぜわしくなつてゐるからでもうろう。業間の境界では、めしく交渉する対象に對しては、むしろ冷靜を誇示した眼こそ必要。なほそこで、領のついを一つほどの賃料をとりあげてみようと思う。

一つは、村落研究を終しての既全の準備による調査である。この問題は、こと新しくひともたるが、さざざんでせとくに数年前の其調査

論争以来、いつそう切実さを加えてきたようと思われる。概念自体は研究の手段であるから、變りうることは当然であるとしても、確かな約束がなければ積みあげて検討を加えていくにも手の届しようがない。自然村、同族団という、いまでは古典的な概念の再検討も近時さんざんであるが、これらはどういう理論的範疇なのか、どういう歴史的段階ではいかなる具体形をとるのか、というような点について其源の理解がないと、それから以後の概念をつぶさげていくのにも非常に困難する。

手法が必要なのが、等々の問題を解決してからぬと、これまでの貴重な道産を無視してしまふか、いつそ破壊することばかりに終りてしまう。過去をよまえぬと組織論の必然の要請すらも無意味になつてくる。従来から行はれてきたこととの伝統がことにもあるのだと思ふが、同族理論がその役を降り物であつたことを改めて想起する必要がある。組織論と構造論は、単に新旧といひ対象ではなくて、即単的に行わなければならぬ。

集團といふやうな概念もでてきた。畢竟といふよりまだ言葉の段階であるかと思うが、私自身、それを使つたり與いたりしてみて、ときどき新しい言葉まで新しい現象を説くことの難かしさに思いあまることがある。理論論や演説論と関連して、従来とはいくらか異なつた内規をもたせようとする試みであるかと思うが、一方では、戰後既に昭和三十年以降の農村を描く場合のひとつに體識みたいになつてきている。恋物の渦中にあつて対象を見究めようとするものかしきが、これらの用語のうちにも認められてゐる。

しかし、經濟分析ないし構造論に対しても、經濟論はどういう位置づけをもつのか、從來の構造論のなかには農民の主體的役割を論ずる余地が少かつたかどうか、行動的工夫ギミック等論議のなかで扱うときほどちいさな分野

それにもしても、共同化をはじめとする所し
い農民の諸組織を講造論のなかでどう位置づ
けるか。私は昨年秋の村研大会の討論の内容
を知らないのでよくわからないが、これまで
二度の太会の主題をみると、これを政治体側
と村落構造の問題として扱つてさだし、既尾
の運動と意識をかなり前面においたして論じ
るようになつてきた。ちょうど機会である。
経済史や農業経済学の専門家には多少おのの
毒でもあるが、種造論における社会学的諸理
念を一歩ゆづき皆なで再検討する会が持つて
たらと想う。集まりやすいグループをつくつ
て、専門委員会風に討論して結論をもちよる
のも一策であろう。

二つ目の問題は、村落構造の変動論について
である。ここでも变动の過程分析と運動角
とが対立的で、ないしは無関係に論じられる

論ではなくて変革の理論だとよくいわれるのが、これも從來の農村社會学における運動論の静的分析ではないのは運動論の欠如による。こう見方には、從來の講述論にむけた運動論の欠如やとつてつけたような手法に対する非難がこめられているが、ひいては運動論をもちえなかつたいままでの講述論を根本から否定する方向にまで進んでいる。

私は、この批判が間違つてゐるとは思ひません。ある意味では、戰後の農村社會学の最もめざましい發展方向を示してゐるものだと思うが、そこにやはり一沫の不満がないわけではない。組織論による構造論の起死、運動論による運動論の脱皮というシエーマは、変革の本体性を農民自身に求めようという点で、従来にない清掃さをもつてはいる。しかし、農民の組織や運動は、それ自体構造論的な視野においてみないと、どうしても浮きあがつてしまいやくなる。組織も運動も元來、確実に内在的な柔軟性に触発されてはじめて可能である。むしろ、組織や運動が、まさに脱皮すべき構造にどう対応するか、そのどこからでてくるのか、という点を充分に検討することが先決であると思う。さういふの実に多様な農民の組織化は、研究者をとまどわせるのが充分であるし、そしてまたそれら

を「農民組織」とでも総称する以外に方法がない感じさえもする。しかし、それらがいまそれが本当にエネルギーにみちているとは到底考ふられないし、かといって何らの内在的原理もなしにつくりだされたのではもちろんない。こういうときにこそ、村落の構造やその変動をじつくり見究める絶好の機会である。新しい現象や過程を説明する新しい原理をひきだりもつてくるのではなくて、従来の概念や仮説が卑劣の検証にどこまでたどるか、という点の考証ももつと払われていよいよ

組織論的志向をもとう

村研大会でのこと数年の傾向は、政治体制と村落から農民組織の問題へと、一連の発展的主題を中心に討議がすすめられるようになってきた。いままで光りのあたらなかつた開拓領域が浮き彫りにされて、まことに慶賀すべきだと想うが私のひがむか、どうも現在的関心に偏りすぎるようと思われてならない。研究者として、激しい運動期に身をおいている以上、こうした関心は当然すぎるほど当然であるが、それぞれの研究者のもつている方法論的な前提をもう少し時間をかけて語り合つてみたいものである。組織論や運動論が、方法的視角としてどこまで有効であるか従来の構造論や変動論の汎式がどういう限界をもつていてるか。それらを研究者の姿勢とあわせて論じることがぜひともほしいところである。経済史学や経済学から汲みとりえた多

この示唆も、まだ断片的に終わらせたくないものである。

組識論的志向をもとう

村研のエネルギー

藤 吉 雄

早いもので村研はまもなく十周年を迎える。村研のニニータ性格とエネルギーは、村研を共通の研究の場とする異なつた分野のひとびとが互に社交儀礼ぬきで卒直に交流できる雰囲気とともに、なによりも現実の村落生活における中核的問題をつねに着実な革新とともに取り上げてきたという点に由来するといつてもよいであろう。発足以来の大会課題をふりかえつてみても、「農地改革と農民運動」、「農家人口の変動と家族の構造」、「村落協同體」などは、社会的にも多くの学会でも広く関心を集めていた重要な問題であつた。きためて大端捉を表現であるが、それらの課題を中心にして、社会学によつて蓄積されていきる機関、同様の研究との結びつきを可能とし、また「村落共同体」論は社会学における「家連合」・「自然村」・「村落構造」論などと意識的接觸的に符合する傾向を生みだした。わが経済史学や歴史学と社会学がはじめて真正意義で共通の関心の場を具体的な村落生活の中に見出すことができたのであり、このような状況

これを研の工本ルギーをもつとも思はせしめ
た原因のひとつであると考えてよさうであ

卷之三

の踏みであり、おそらくそこには村田の新しい
機関のための工本ルートが組められてゐるの

の問題点

佐藤勲

九

農民組織が何を意味するのであるかが必ず

じも明らかでないにしても、もつとも広い用

では、農民が主体的に参加し、構成してい

さういふ範圍内では、洋車の廣告で村

である（この場合、集団と区別される組織）。

の意味が明らかにされる必要がある。」そして

、狹義の農民組織を、広義のそれのなかで

北東でゆくといふ路線が、かなり有力を拂近

勢として考えられていると思われる。その

ために此、頃ある用賀の検討ではなく、当然

のことながら、村落構造の把え方ににおける基

的枠組と、農民組織の分析視角の基本要件

とを明らかにすることが必要である。

(1) 新らしい農民組織なり、所轄能郷郡在

りが問題にされるのは、いわば伝統的な概念

本題によつて処理しないための面が出て来て、

から化粧がならない。既存の構造化要因が

化し剥離し、そこに斬らしい側面が形成さ

れてゆく。このはあい、単に原形の変容と結

卷之五

これが本質的問題で、いさうことは本質的な取扱である。そこから村研の隠喩的なエネルギーを萌出せしめることが可能であるろう。

しかし卒直にいって、村研の種次の伝統的構成からすれば、必ずしも純化し盡れまい代物をいきなり飲込んでいさぎふ下嘲氣味の氣配もないわけではない。“月研の発想”といふ表現は、やゝオーバーだが、異教の充分解らぬ空氣がいきなり顯露されながらも社会学以外の参加者が確実に減少しているのは事実だして、筆者や討論もかみあうたちの共通の基盤が薄れてバラバラの角音が多く、研究成績の統合への努力が必らずしも技術的に遂行されてい

いであらう。もし、かつて存在したと想われるる付附の其の場なるものが、個性的で歴史的な日本との付属の特性を内制から理解しようとするとするにあらざれば、住民自身の微妙な利害感や彼等の主体的なベースペクテブに対する深い洞察に共いて、われわれの研究課題を笠置つ付説明していくことも必要である。現在圧倒的に組織的を圧力を及ぼしていくる階級や大企業、流通機構に直接枝立かのままで対処せねばならない農民にとつて、階層分離による利害の分裂とともに、伝統的な家連合や地域的連帯などのような意識をもつてゐるかは、専分的考慮せねばならない緊急を問

て、英露の農民組織を、広義のそれのなかで、
把えてゆくという路線が、かなり有力な擁護
姿勢として考えられてゐると思われる。この
ためには、單なる用語の検討ではなく、当然
のことながら、村落構造の把え方における基
本的構綱と、農民組織の分析視角の基本要件
とを明らかにすることが必要である。

(1) 単らしい農民組織なり、新機能集團を
りが問題にされるのは、いわば伝統的を概念
構造によつて処理しえない側面が出て来てし
るからに經かならない。既存の構造化要因が
変化し動搖し、そこに単らしい側面が形成さ
れてゆく。このはあい、單に原形の変容と解

しかし、それがの姿勢は緩しく、その中城的傾向も変質しつつあるとも考えられる。畢竟農業生産構造や農政は大きな転換期に直面しているし、仙方町村合併をはじめとする仙方行政の中央集権化の傾向や、いわゆる過渡開拓事業の進展とともに、多くの村落は多くれ少かれ危機的な渦渦裡にあると見てちがいない。討研の研究課題も、これらの状況を反映してか、政治行政と村落（「農政の実施」と村落社会）・共同化など、もむめて現在的で直接的な問題に移行するようになつてきただ。『外会学』は社会的現象の科学的自觉化である、とすれば、まさに変貌しつつある村落の基本的問題に立ち向うことは当然の要請である。

の端みであり、おそらくそこに村研の新しい構築のための正本ルギーが秘められてはいるのかも知れません。

しかし村研の其種の場とは、たんに空間的・在郷的だけで村落が共通の対象となつてゐること以上のものであると思われる。呼びおおまかを表現とやり譯解される危険が多いが、財政研究において客観的に重要と思われる問題を生民の主体的な意識にかかわりなく客観的範囲に留めし分析し、そのいわゆる世界史的範囲づけ。を試みることは、比較研究と社会科論理的認識の発展に大いに貢献するであろう。しかし具體的な個々の農民にとって、それはあくまで才三害のよそ草、としか映らなかつてゐであろう。もし、かつて存在したと思われ

農民組織をめぐる一、二
の問題点

佐藤勲

農民組織が何を意味するのであるかが必ずしも明らかでないにしても、もつとも広い用法では、農民が主体的に参加し、構成しているあらゆる組織集団がふくまれるであろう。しかしより限定的な用法では、既存の構造に対して反発的、反対的な組織を意味しているようである（この場合、集團と区別される組織の意味が明らかにされる必要がある。）そして、狹義の農民組織を、広義のそれのなかで

地とを問題にするのではなく、新らしい構造

論理を明らかにする必要がある。この新らしいモデルは、まず第一に、産業社会の根本的特性である経済合理性の、村落生活におけるそれをほどかの背離を明らかにするものでなければならぬ。

確実化、都市化、あるいは官僚化として想えられる一連の運動過程は、社会関係の想定しない結合様態の進歩として「機械的結合」をもたらす。街らしい構造化のモデルは、機能集団的社會關係のなかで典型的にみられる「効率の論理」とでもいへきものによつて特徴づけられる。社會的現実の各側面ないし社會關係の型における、このような変化は、いまでもなく其本的を役割行为主体者としての家族の変遷を前提としている。いわば、家連合における開拓づけの契機として機能集団的結合が効果的に作用していく点に、このモデルの戦略的価値があるといえる。

(2) かりに村落とは、商業をいたむ人々の間に、生活と生産の場である家庭を拠点として、主な生活技能を包括的に充足する一定の範囲において形成される社會システムであるといえるとすれば、村落構造の分析構成は、一定の地域が強烈になりうる諸条件の分析と、そのうえで展開される社會關係システムの分析とを中心とするものでなければならぬ。とのばらしい、一定の地域が漸進的にたりうるのは、それが生活過程において、一定の

構造的に重要な基準を作りあげているからである。

そして社會学的対象把握の特性がある。そして社会的現象把握の特性がある。この二つの側面は、体制側からのコントロールが強い。みち、この二つの側面は、体

制と、ささらには構成メムバートの態度・意識といつてよろしく、体制から、小集団はいよいよ及ばず、成員のパースナリティをいたるまで

の、社會構造的には、パンツな要素を考慮に入れなければならない。これは、分析構成の最大限の範囲なのであつて、分析の焦点は

あくまでも村落それ自体の機能と構造の把握にあることはいうまでもない。現在のところ、われわれの手にとどく分析構成は、村落内の社會關係を、經濟關係や政治關係をふくむ、広い社會關係として理解し、たとえば、村落

の点において、原本助教授によつて久しく取り組んでいた。インテーナルな、あるいはインフォーマルな、社會關係の、いわば生きてい

る現実關係との接点においてのみである。ところが、行為主体者としての農村家族と個々の成員が

取り組んでいた。インテーナルな、あるいはインフォーマルな、社會關係の、いわば生きてい

る現実關係との接点においてのみである。ところが、行為主体者としての農村家族と個々の成員が

取り組んでいた。インテーナルな、あるいはインフォーマルな、社會關係の、いわば生きてい

る現実關係との接点においてのみである。ところが、行為主体者としての農村家族と個々の成員が

取り組んでいた。インテーナルな、あるいはインフォーマルな、社會關係の、いわば生きてい

新刊紹介・隣人について 解体期封農村の研究 ——諫訪藩今井村——

中村吉治・鳥田隆・矢木明夫
著

〔三〇六〕

権力)の次元における組織化を中心としている。この二つの側面は、体制側からのコントロールが強い。みち、この二つの側面は、体

制とか制度といわれるものとの直接的関連はない。存在しない点で、本來的に外部的なものに規定されている。しかし逆に、政治の

次元ではいわゆる反体制的な組織化がみられることもある。そして、これらの二つの側

面が現実に組織化され、機能するのは、生活行為主体者としての農村家族と個々の成員が

取り組んでいた。インテーナルな、あるいはインフォーマルな、社會關係の、いわば生きてい

る現実關係との接点においてのみである。ところが、行為主体者としての農村家族と個々の成員が

取り組んでいた。インテーナルな、あるいはインフォーマルな、社會關係の、いわば生きてい

る現実關係との接点においてのみである。ところが、行為主体者としての農村家族と個々の成員が

取り組んでいた。インテーナルな、あるいはインフォーマルな、社會關係の、いわば生きてい

る現実關係との接点においてのみである。ところが、行為主体者としての農村家族と個々の成員が

取り組んでいた。インテーナルな、あるいはインフォーマルな、社會關係の、いわば生きてい

る現実關係との接点においてのみである。ところが、行為主体者としての農村家族と個々の成員が

もう少し組織的を採取が考えられてよい。も

つとも、このような行動科学的発想にたつと共に、マクロな構造原理としての階級的、社

会運動的視察にたたかないと、木を見て森を失

ううおそれがあることはことわるまでもない。

いつも、さまざま粗陥化過程が考えられるのであるが、それだけで經濟ないし政治(

第一章 緒論
第二章 種類と概説
第三章 通史中の商品經濟と地主制
第四章 近世盛期の農業經濟と地主制
第五章 新世盛期の地主制
第六章 資本主義の変動
第七章 資本主義の展開と地主制

本釋は、近世經濟の發展を種類別に地主制・農業・商業の三章に分けてとらえ、その他の村落共同体の変容とその資本主義化の過程を、諏訪野今井村および周辺諸村（現在長野市域）について、過去五十年にわたり、具体的研究をした結果である。その間、文部省・毎日新聞社・ハーバード大学燕京研究所からの助成を得て、諏訪野の研究がノーブルズ・一村落構造の歴史的分析において、南都篠山村における村落共同体の構造、その上に成立する封建的の土地所有・剥削上の村の性格を明らかにし、さらには同体の経済過程を大正末期まで追究した。

本釋は右の研究を礎石としてふまえながら、近世期のいわゆる封地的性格に留まる通説を捨て、石高割・村の本質を決定的に明らかにすることによって証拠し、農業生産の精神性を性格規定を行なう。そして製糸・錦打を中心とした商品經濟の展開、地主制の成立を鳥居構造の突破と謂ふべし、洋改期より明治末期におけるて論用し、資本主義発展の前提条件を追究した。

右のような内容の全体を一貫する基本的な問題は、やはり村落構造の変化である。その

ためにも、今までにない試みとして対文冊が明治期までの今井村全体の各家の系譜を、「今井村家系譜」という大掛かり表として収め、研究者の参考に貸した。さらにこれらの家々が形成するいわゆるマキ同族集団が社会経済生活においてどのような内容変化をとげたかを、マキの組み替え、マキの廻り化などの現象について実証した。この過程が、ひいては幕末期長野村構造変動のシムボルとして、大前原の性と小前原百姓の対立をめぐる「小前騒動」に発現するのであるが、この期間の経過と本質についても、今井村と小井川村を例として詳細に追記した。

また全籍にわたって、近世・近代の村落社会研究のため利用価値の高い図・表などの資料を豊富に収録している。

ともあれ、横山村の研究にひきつづき、この今井村の研究を公刊にすることによつて、社会学をはじめ社会科学諸部門の間で統一的な村落研究をなしす十数年に一つの寄与をなしえるものと、ひそかに信じている。

学術出版社編輯部の折から、会員諸賢におかれでは本釋の購入をうながしておられた。

方をお車で付からい下さいますよう。なお予約申込の際は特に二回引合へ〇〇〇円と述べてお問い合わせください。

御申込の際は、ハガキにて左記宛名、御住所、芳名、個人公費別の部数と、必要な限り、（予約申込先）

仙台市片平丁

東北大学経済学部・日本經濟史研究室

中村吉治

八 事務局 より

前年度事務局でありました東京学大に於ては暮末期長野村構造変動のシムボルとして、大前原の性と小前百姓の対立をめぐる「小前騒動」に発現するのであるが、この期間の経過と本質についても、今井村と小井川村を例として詳細に追記した。

本号は異例でござりますが会員の研究成績による新刊紹介・購入についてスペクタスをとつてみました。これを実例とし、して、会員の方々のご健育を積極的に図るよう、適宜事務局宛送稿お願いします。意とするところを御賛美下さるまして、御協力をお願いいたします。

次号はより充実した通じをお届けいたしたいと思つております。多くの会員の皆さまからの投稿をお願いします。それにつきましても、会費納入をお願いします。

新年度となりまして、会員の動向についてお知らせいたしたいと思いますので連絡下さいますように合せてお願いします。